順天堂大学 医学部附属 静岡病院
JUNTENDO UNIVERSITY SHIZUOKA HOSPITAL

コード・ブルーセミナー Report

― 子ども医療体験 ―

広報委員会 委員長 **最上 敦彦**

「コード・ブルー」とは患者さんの容態に急変が生じた場合に用いられる救急コールのことです。ご存知のように、ドクターヘリを有する順天堂大学医学部附属静岡病院は静岡県東部・伊豆地区における救急医療の最後の砦です。この日本初の救急医療に特化した「コード・ブルーセミナー」に参加してくれた地域の子供たちが、いつの日か順天堂の救急医療の担い手となって帰って来てくれることを願っています。

コード・ブルーセミナー Report

－子ども医療体験－

今回のセミナーは、地域の子どもたちに少しでも当院や医療に対する興味・関心を持ってもらおうと準備を進めてきた企画です。当日は300人以上の応募者から抽選で選ばれた24人の小中学生が参加し、各種医療体験を通じ救急医療に携わる医師・看護師・スタッフと交流をしていただきました。

医療の現場がはじめてのお子さんが多いとあって、子どもたちの新鮮な驚きやイキイキとした表情が印象に残りました。

コード・ブルーセミナーの模様をレポートいたします。

ドクターヘリポート見学

Q.ドクターヘリって？
A.医療機器を装備したヘリコプター。医療スタッフをいち早く現場へ送り込み、患者さんを搬送することができます。

大迫力のドクターヘリポート。実物はやっぱりカッコイイ!

あこがれのドクターヘリの中を見学！

エコー体験

とても
コンパクトな機器！

Q.エコーって？
A.体の表面に機器を当てるだけで、体内の層面をリアルタイムで観察できる医療機器です。

ここかな? 動脈の位置を探り中

はじめて見る映像に緊張……

自分の体の中を見られるって不思議！

創外固定体験

Q.創外固定（そうがいこてい）って？
A.骨折部分をはさんだ両側の骨にピンを打ち、金属の器具を使い皮膚の外で固定する技術です。

このような器具で骨折部分を固定します

なるほど、そうやって固定するんだね

助け合って固定中！

AED体験

Q.AED（えーいーでぃー）って？
A.心臓に電気ショックを与え、正常なリズムに戻すための医療機器です。

AEDの音声に従って心臓マッサージ

はじめて開くAEDに緊張の表情

心肺蘇生はチームワークが大切

手術縫合体験

Q.手術縫合（しゅじゅつほうごう）って？
A.傷口や手術時の切り口を縫合してふさぐ技術。傷口を密着させて治癒を早める効果があります。

みんな真剣な表情で縫合中

縫合のコツを先生が丁寧に指導

セミナーを終えて

開会式の時には緊張していた子供達も、チームで協力し様々な体験をする中で打ち解け、最後は全員笑顔で集合写真の撮影ができました。「医者になりたい」「フライトナースになりたい」という声もあがり、自分の将来を決めるうえで貴重な体験になったようです。

みんなの感想

面倒を見てくれた先生やスタッフの皆さん、ありがとうございました。病院で働く人の大変さを感じましたが、**やさしくサポートをしてもらえる安心感も感じました。**僕も将来、**患者さんと一緒に戦える、頼りにされる医師になりたい**と思いました。

小学6年生
池田 健 くん

もともと病院の仕事に興味がありましたが、はじめて見たり聞いたりすることばかりでとても新鮮でした。病院の屋上から飛び立つ**ドクターヘリ**を間近で見ることができたこと、**骨の模型に電動スクリューで穴を開け固定する創外固定**がとても印象に残りました。

中学1年生
小野 華 さん

ここ最近、小学5年の娘は**「フライトナースになりたい!」**と頻繁に言うようになり、抽選で参加が決まった時、飛び跳ねて喜ぶ娘の姿が印象的でした。将来を考える上で、このタイミングで**医療の現場を少しでも知ることができた**のは良い経験になったと思います。

保護者
篠原 朋子 さん

今回のプログラムは**地域では非常に珍しい取り組み**だったと思います。子供たちにとってなかなか立ち入ることができない非日常の医療現場で、新しい発見があったのではないでしょうか。子どもたちの**将来のキャリア形成にとって、貴重な学びの機会になった**のであれば大変うれしいです。

医師
三宅 喬人 先生

今回のセミナーは、**実際に手を動かす「体験」を重視**しました。子供たちは、最初こそ医療の現場に対する緊張や抵抗が見られましたが、次第に集中し没頭するようになりました。このような交流を通じて、私たちの**仕事や医療に興味をもってくれた**ことが非常に嬉しかったです。

看護師
松尾 正人

地域の小中学生を招いての体験型セミナーは当院にとって初めての試みでしたが、**県東部を中心に300人以上の申し込み**があり、救急医療に対する関心の高さが窺えました。今後も地域における**社会的責任を果たす**ため、このような機会を増やしていければと思います。

事務員
鈴木 真悠